

高校を核とした新たな人づくり・人のながれづくりプロジェクト

実施時期:令和2年度～

R3年度町予算: 880 千円

R3年度連携自治体の合計予算: 1,422,992 千円(40 団体の合計)

■事業概要

屋久島町まち・ひと・しごと創生総合戦略では、町の人口目標を「2060 年に 11,000 人以上」としており、その指標として、「屋久島高校が維持・存続できる生徒数を毎年確保する」と定めています。

この指標を達成するため、屋久島町と屋久島高校は「屋久島高校魅力化プロジェクトに関する協定書」を締結し、本町の子ども達が、より一層屋久島高校への進学を選択しやすくなるよう、支援を行ってきました。

高校を核とした新たな人づくり・人のながれづくりプロジェクトについては、屋久島高校魅力化プロジェクトの一環として取り組んでいるもので、屋久島高校の生徒数の維持のために、町外から屋久島高校への入学を希望する生徒を募集し、下宿等に際する費用を支援しています。

支援内容	1. 町外からの入学者に対する下宿費等の補助	40,000 円/月
	2. 町外からの入学者に対する帰省旅費等の補助	上限 30,000 円/年

※これらの補助金については、地方創生推進交付金の対象外のため、令和3年度からは、国交省の離島活性化交付金を活用し、50%負担となっています。

■事業の成果

今回の町予算 880 千円は、町外生徒を募集する際のイベント「地域みらい留学フェスタ」に参加する際の負担金に地方創生推進交付金を活用しており、事業実施による受入実績は以下のとおりです。

	令和2年度	令和3年度	令和4年度
町外からの生徒数	2名	3名	3名(予定)
受入実績(見込)	(埼玉県1、神奈川県1)	(東京都1、大阪府2)	(東京都2、宮崎県1)

町としては今後、1学年3～5名の町外からの生徒を確保していく方針です。

令和2年度から実施している「高校スクールバスの料金低廉化(どの集落からでも一律 4,000 円)。

令和2年度実施した「高校魅力化に関するアンケート」の結果に基づき、令和3年度は教育支援アプリ(スタディサプリ)の導入支援を実施。今後も屋久島高校魅力化に取り組めます。

「高校を核とした新たな人づくり・人のながれづくりプロジェクト」への評価・コメント

人口維持に対する一つの指標としての屋久島高校の生徒数という指標に対し、具体的に取り組み実施していることは非常に良いと思います。

また、行政側の主観ではなく、実際の利用者の方のアンケートに基づき、無駄なものではなく、意味あるものの導入に取り組んでいる姿勢も評価できるのではないかと思います。年々町外からの受入実績が増えている要因をしっかりと分析し(広報に力を入れた、打ち出し方を変えた等)、成功要因と考えられるものを強化していくことで、よりいい結果につなげることができるのではないかと思います。

学習環境の整備だけでは、なかなか屋久島高校を残すことはできないと思います。

町外から進学してきた人たちの進学理由を聞き、どのように屋久島高校に魅力を持たせ、留学生を増やしていけるかということを考えていくことが大事だと思います。

人口減少が続いている中、学習環境の整備を行うことにより、どれだけの生徒が屋久島高校に進学するかという検証をしつつ、留学生の受け入れに力を入れていかないと、生徒数はどんどん減っていくと思います。

そのため、町外から留学生を受け入れるための受入先についても、徐々に増やしていく必要がありますので、受入環境の整備を進めてもらうことをお願いしたいです。

また、屋久島町の子供たちを、なるべく屋久島高校に進学するように努力をしてほしいと思います。

全国的に、生徒を受け入れるための競争だと感じています。

この離島に留学していただくことを考えると、やはり相当な魅力だったり、違いというか、そういうところを打ち出していないといけないと思います。

自然環境がいいのはもちろんなんですが、色々な形で分析をし、留学生にお話を聞いたりしながら、魅力や他校との違いを見出せるよう取り組んでいく必要があると思います。

スタディサプリ(学習支援アプリ)を今年度導入しているので、是非、実際の利用率がどれぐらいなのかということを検証しないとイケないと思います。

このツールを入れることによって現場がどれだけ苦労したのか、上で決まったのを下におろしただけで、現場の担当の先生方がすごく苦労したとか、そういうのであれば、また改善しないとイケないところがあると思いますので、そこら辺の視点も入れて検証していただきたいと思います。

サプリだから供給という意味、需要があり初めて供給が生まれ、そのバランスがとれるため、そこるところにそのプログラムを導入したことから、次の年まで繰越していかないと、単年度だけでは傾向が見えづらいのではないかと思います。

管理職まで導入して、質を高めていこうという動きの報告でしたので、いい方法だと思いますが、効果をもう少し見てみないと、それが今の高校の魅力化の中で、どのくらい定着するのかということになっていくと思います。その辺の情報データのとり方について、双方にとっていただければと思います。

生徒は75%の回答率で、いい方法だと言ってるわけですが、今度は保護者の立場から、今、働き方改革の問題、それは職場の中での働き方改革であって、保護者の立場から見ると、また経済負担やいろんな問題がかかってくるのかどうか、その辺のデータも近い将来、ぜひ示していただきたいと思います。

屋久島高校の存続の関係ですが、議会としても取り組もうということで、総務文教常任委員会で、寮の關係等を視察してきました。

大島の古仁屋高校と屋久島高校、少し違うところもあるんですが、生徒数が減っていき、高校存続について非常に危機感を感じている状況です。

御承知のように奄美大島は奄美高校等が他にもあります。

道路が改修され、道がよくなり、以前と比べ、遠距離通学の時間がかなり短縮されています。

そんな状況になった古仁屋高校の存続について、話をうかがってきました。

町の方で、寮を整備し、そして地域の御婦人さん方にお世話をいただきながら運営している状況も見せていただきました。

屋久島高校の場合は、3 クラスをどう維持するかということで一生懸命になってるわけですが、いずれ近い将来、同じようなことになると思います。

過去のこのデータを見ましても、屋久島高校への進学率には波がありますので、こら辺の分析もしながら、特に屋久島高校は、実業系がありませんので、鹿児島に行くのは各々の考えでやむを得ないところもあると思います。

普通科クラスの子供たちを、どのように屋久島高校へ進学させるか、魅力ある高校にしていくかということ、地域に住む我々、保護者、そして地域の皆さんが、今一度考え直してやるべき時期に来てるのかなというふうに考えています。

議会としても、そういうところに視点を置きながら、昨年の奄美の研修をもとに、今後取り組もうということで議論をしている最中でございます。情報共有をさせていただきます。

学科設置の問題、将来展望として考えておかななくてはいけないのではないかと、今ある学科だけで努力せよという考え方が基本になってますが、来年度(2022 年度)から、商業高校の中に文科省が観光ビジネスというコースをつくれます。

情報ビジネスでのICT、IoT等、インフォメーションの技術ですが、それが産業と結びつかなければ、あまり意味がありません。資格をとること、その取った資格が職業選択に生かされるということが子供たちに浸透してくれば、また変わってくるわけです。

その観光ビジネスというのが来年度からスタートしますが、実際にこういうビジネス商業科等で取り組んでいくことになります。

例えば南日本新聞で指宿商業高校の記事が出ましたが、ここの校長先生が、今年、全部学科名を変更しました。今までの情報科とか商業科ではなく、情報マネジメント、会計マネジメント、商業マネジメントと。

そして、どれだけ減ったかという、これだけ他の高校の進学率が減少している中で、名称を変えたにも関わらず、商業マネジメントが81%、情報マネジメントが110%と、定員をオーバーしているわけです。

これを踏まえると、学科構成の変更というのは、かなり力になるのではないかと思います。

ITを使ってる情報ビジネスという学科もありますが、ビジネス情報学科というのは、この設置学科に同じ名前を使って入替えてあります。

参考までですが、観光ビジネスというのが旅行関連、宿泊関連、交通関連、飲食関連施設関連など、関連業を支える様々な仕事と関連するということで、今後スタートします。

屋久島高校は普通科45%、情報ビジネス科の方は72%とちょっと高くなっていますが、これがずっと同じような形で普通科が落ち込んでいき、情報ビジネス科だけが、高水準で移動していくとなると、普通科との棲

み分けの問題、同じ学校の中で、集まる方と集まらない方があるということ自体、子供の意識にどう影響していくかということも、教育の中でも、あるいは教育行政の中でも、非常に重要なポイントになってくるのではないかと思います。

なかなか定員を満たすまで持っていくというのは、厳しい状況です。

鹿児島県で1番出願者数が高いのは鹿児島南高校ですが、南高校は商業課が1番高いです。

ビジネスというところに、今フォーカスが当たり始めてきてるわけです。

それを読まず、旧態依然とした学科構成をずっと続け、確保しなきゃいけない、確保しなきゃいけないと言っても、子供たちに情報が伝わっていかないということになります。

県内の高校の状況を見ますと、特に、離島の問題というのは、今本当に深刻に捉えています。

参考までにお聞きいただきたいんですが、大学なんかは、特待生という制度を入れるとグッと増えるんです。

これをカットして、ABCぐらいのランクで全面特待、半額、3分の1とあると、必ず、全特の方にはグッと来るんですが、その人たちが振り分けられていきます。最初からその半額というところを目指すわけではありませぬ。やはり奨学金がつくということは、スポーツだとただ技能だけではなく、プレーする場所もないと駄目ですから、そういう意味で、技術と評価と指導者、問題はこれがないと、指導者というのが高校時代は特に大きな影響を与えたいと思います。最近では先生方が全部、クラブや部の監督やコーチをするのではなく、外部からそれなりの経験者、有識者を呼ぶという傾向がありますので、何かそこに民間と高校がタイアップするような新しい仕組みを作り、屋久島高校と情報発信していくと、あそこでは、こういうスポーツに素晴らしい指導者がいるんだみたいな形になり、学業と部活動、スポーツというのが、上手くオーソライズできるのではないかなと、こういうことも一つ検討材料になるのではないかと考えてます。

今の子供たち、我々の時代は、野球とか柔道が主流でしたけど、今は球技の方でも、サッカーやバレー、バスケットとか、色々なスポーツが普及しています。

その傾向といいますか、今の若い世代の人たちの嗜好性というものも含めて、また調査をとっていく必要があらうかと思いますが、当面、こういう状況で今推移してるということ、我々は確認しながら、どなたかの御意見の中でありましたように、増やすのではなくて減らさない努力も大事だと思いますので、そこを含めた対応策も並行してとっていく必要があると感じています。

町外へ進学する生徒も仕方がないのではないかと、やはりそれなりの目標があって、出ていかれるんだろうと思いますので、そこについて対応するとなるとなかなか厳しいのではないかと気がします。

屋久島に学ぶ理由、先ほど意見が出ましたように、この学科構成で本当にいいのかということもありますし、観光もそうですが、屋久島で学ぶべきものは何があるんだろうと、自然環境とか世界遺産があるわけですから、環境ビジネス科とか、屋久島でないと学べないもの、地域みらい留学で来られた皆さんの感想の中に、大自然の中で勉強したいという方もいらっしゃいましたが、全国には大自然がある学校というのは多分他にもあると思いますので、競争する上では弱いところもあると思います。

世界遺産の島であり、ここに来る理由をつくるべきじゃないかと、学科の編成というのも見直すべき時期に来てるのではないかと思います。

今のような推薦枠があるかはわかりませんが、大学なのか、就職なのか、少しでもいい大学に行かせたい、少しでもいい就職先を見つけたいというふうに親御さんは思ってるんじゃないかと思っています。

普通科に入って、大学進学を考えていらっしゃるのであれば、推薦枠が多ければ多いほど、選ぶ大学があればあるほど、屋久島高校に残る価値はあると思いますし、町外の普通科に進学して、厳しく競い合っただけで大学に出すのもいいんでしょうが、推薦枠等があれば、ここ屋久島で一生懸命勉強してという考え方もあります。

新たな学科の設置ということに関し、この屋久島でしか学べない理由をつくと、屋久島はどこに行っても通用するネームバリューがありますので、そこで自然環境等を学べる学科があれば、興味がある人たちが進学してくることに繋がると思いますので、再考されるとどうかと思っています。

やはりこの地域のポテンシャルです。

ここをもう少し掘り起こさなきゃいけないのではないかと、環境と観光という二つの切り口を出しましたが、今も環境コースはあります。

ここ屋久島で第1回世界自然遺産会議が開かれた時、国際会議の第2分科会の会場には、高校生がたくさん入りました。屋久島高校の生徒が前列占めていて、その光景見た時ちょっとゾクとしたことを覚えています。この子供たちが、自分たちの地域のことを学ぶ機会を持てたというのは、すごく稀有なことですよ、どこでもできる話ではありません。

分科会では、ワールドナチュラルヘリテージという言葉が出てきて、世界遺産じゃなく、自然遺産と文化遺産があるということ、島民が初めてそこで考えたわけです。

そしてこのすごいものを次の世代にどうやって教育の世界で受け継いでいくかというようなことも、一つの大きなテーマになりました。

次の次世代をどう育てていくかという視点では、高校だけの問題じゃないということを入れておかなければいけないと思います。

島内全ての人たちが関心を持たなくてはならない、そこを間違ってしまうと、教育の世界だけで置き換えてしまうと、見誤ってしまうんじゃないかと思っています。

屋久島高校の教育の存在価値、そして、親御さんたちの理解と地域経済との関わり等、屋久島高校をどのように捉えていくかだと思います。やはり、屋久島高校のサポーターをつくるのが非常に大事だと思います。サポーターというのは支援者、後援者、理解者というような人々を増やしていく、それは何も屋久島にいる人だけじゃなくていいと思います。県外から屋久島高校をサポートするような集団をつくれれば、これは情報発信としていいと思います。今はネットですぐに情報が入りますから、屋久島が島内だけで完結するような情報発信をしている限りは伸びないと思います。

留学生のこと、そこら辺の研究を、ここ何年かでやってみると、もう少し可能性が出てくるのではないかと思います。

例えば、鹿児島県の屋久島高校から、こういう生徒さんが活躍してますという情報がポンとネットに出てしまうと、すごく反応が早いです。親御さんもそこに出してみようとか、それから、地元のお子さんたちも、可能性があるとなれば、そういうところへ挑戦をしていくと思います。

このままさらに継続持続、それからその情報解析をして、ぜひまたフィードバックを行っていただければと思います。

少子化が進み、町の活気が失われないよう、高校を核に人口維持に取り組むことは、非常に良い取り組みだと思います。

1点、前から気になっているのが、「例年の出願者数にみらい留学生の数が含まれるか」という点です。令和4年度は、屋久島高校への出願者数は36名でしたが、確かここにはみらい留学生の人数は含まれなかったと認識しています。みらい留学生を増やして、ここに反映できるようになれば、2クラス維持も、より現実的になってくるのではないかと思いますので、県とも連携して、ぜひ取り組んでいただきたいと思います。

委員の方々のコメントを重視して、前進していただきたいと思います。